

灯に触れて吉兆の鯛透きにけり
葬り火は短く枯れし草に燃ゆ
きさらぎや拾ひて軽き母の骨
永き日や画布をへだてゝ裸婦と画家
迷ひ来し蝶滝壺を抜けられず
メーデーの列につきつゝわれは記者
火の山にいつくニ夕村祭り来る
浜暑しだまつてゆけばなほ暑し
かたき葉にあたりし雨の音涼し
庇より出てくる雲や昼寝覚
ハイヒール爪先立てゝ墓洗ふ
ある窓の夜なべの顔にぶつゝかる
下駄はいて貸本屋まで雁の空
コスモスの風紅白をまきちらし

夜寒の灯ちらばつてをり操作場
父鶴におくれ三羽の母子鶴
冬波の洞にしぶけば泣くといふ
子の肩にとどまらずして银杏散る
おでん屋の戸のあちら開きこちら開き
飴ねぶる頬の動きや毛糸編む
婢の皿を洗へば聖夜果つ
年忘れサンドウィッチではもの足らず
カント忌や兄の蒐めし哲学書

二〇一五年七月二八日